

9月14日(日) サムエル記第一1章6～8節

「また、彼女に敵対するペニンナは、主がハンナの胎を閉じておられたことで、彼女をひどく苛立たせ、その怒りをかき立てた。」(6節)

ここには、はっきりと「彼女に敵対するペニンナ」と記されていて、詳しいことは分かりませんが、ハンナをひどく苛立たせ、その怒りをかき立てるようなことをしていたのでしょうか。そして、そのペニンナのハンナに対する攻撃材料が、「主がハンナの胎を閉じておられた」ことでした。7節には、「そのようなことが毎年行われ」とありますので、かなり継続的に行われていたのでしょうか。そのような中で、「ハンナは泣いて、食事をしようとしなかった」とありますが、そのくらいハンナはペニンナの攻撃によってストレスを抱えていたことが分かります。そのようなハンナを夫のエルカナが8節で慰めていますが、その慰めは決して口先だけのものではなく、彼は妻ハンナを本当に愛していたのでしょうか。

5節「主は彼女の胎を閉じておられたが」6節「主がハンナの胎を閉じておられたので」と二回繰り返しながら、ハンナに子がないのは、主が彼女の胎を閉じておられたことが原因であることが明確にされていて、ハンナに子がないことは主のみこころと深いご計画に基づいていることが明らかにされています。みこころと深いご計画とによって主がとどめられることで、私たち自身も手にできないものがあるかもしれません。それが、時には神に敵対し、私たちに反対する人たちからの攻撃材料となることがあり、私たちにストレスを与えたり、心の痛みや悲しみを与えることがあり、そのような時には人の慰めも役に立たないと思えることもしばしばです。しかし、そのような悲しみは、私たちに謙遜にし、人から来る慰めや解決を求めさせるのではなく、祈りを通して私たちの心を主に向けさせます。私たちに与えられないものがあっても、それはかたちを変えた主からの恵みであることが多いことを覚えましょう。

9月15日(月) サムエル記第一1章9, 10節

「ハンナの心は痛んでいた。彼女は激しく泣いて、主に祈った。」(10節)

シロでの飲食が終わった後、ハンナは立ち上がり、祈るために主の神殿に行きました。ハンナの心は痛んでいました。その心の痛みは、激しく泣くという行為に現れました。そして、彼女は痛む心のままに主に祈りました。私たちも心の痛みを経験し、それが激しい嘆きとなることもあるでしょう。私たちは、そのような心の痛みをかかえる時にどうするでしょうか。人に慰

めを求めますか。しかし、これまで学んでまいりましたように、夫エルカナは敬虔な人であり、ハンナを愛していましたが、彼には限界があり、心を痛めるハンナを本当の意味で慰めることができなかつたように、人は決して本当の意味で他人を慰めることはできません。また、時が解決すると思われる方もあるでしょう。時が解決してくれるような心の痛みであればいいですが、子がないことでハンナは心を痛め、敵対するペニンナがハンナをひどく苛立たせ、怒りをかき立てていたことが、毎年繰り返して行われていましたから、時が解決することを期待することはできなかつたことでしょう。そのような中で、ハンナは主に祈りました。主の祈るということは、まず自分や周りに頼らず、主にのみ頼りますという意思表示の現れです。それと同時に、主に祈るということは、謙遜の現れです。自分にはできないこと、また人にとっては無力であることを認める時に、人は神に祈りの手を上げます。人は、自分で何とかかなると思っている間は、なかなか祈らないものです。

私たちは、これまで心痛む経験をしましたか。その時どうされましたか。今心痛む経験をされていますか。主の御前に出て祈っていますか。もしハンナのように謙遜に主の御前に出て祈らないのであれば、その理由は何でしょうか。全知全能の神に祈れることは恵みであり、クリスチャンの特権です。なぜ私たちは、それを放棄するのでしょうか。

9月16日(火) サムエル記第一1章11節

「万軍の主よ。もし、あなたがはしための苦しみをご覧になり、私を心に留め、このはしためを忘れず、男の子を下さるなら、私はその子を一生の間、主にお渡しします。そして、その子の頭にかみそりを当てません。」

ここに誓願をともなうハンナの祈りの内容が記されています。アドベントによく読まれるマリアの賛歌の中の「この卑しいはしために目を留めてくださったからです。」(ルカの福音書1章48節)の部分とハンナの祈りにおける「私を心に留め」の部分の共通性が多くの人によって指摘されています。

まず、ハンナは自分のことをはしためと呼んでいます。はしためとは、召使いの女、下女と国語辞典では説明されていますが、まさに主の御前にあつては、自分のはしめのような存在であると認識していたところに、彼女の謙遜が現れています。恐らく、ハンナ自身が、自分は主が見てくださったり、心に留めてくださるような存在ではないし、主の御前に出て祈ることのできるような者ではないと思っていたのでしょう。私たちにも、このような謙遜さがあるでしょ

うか。逆に、主なる神様がしもべのようになり、私たちの願いを聞かされている存在となって、いつの間にか立場が逆転してしまっているということはないでしょうか。

心に留めというのは、ただ単にその人のことを忘れないでおくということではありません。その人のために何らかの行動を起こさせられることを意味しています。ハンナの場合であれば、男の子が与えられるということです。そのことについての誓願として、その子の頭にかみそりを当てないなど、ナジル人として主にお渡ししますと言います。(注：ナジル人については、民数記6章を参照) 私たちの祈りも、主が心に留めて行動を起こされるような祈りになっているのでしょうか。すなわち、私たちの祈りが、自分中心の祈りではなく、主のみこころにかなうかたちにおいて、信仰をもって熱心に祈っているのでしょうか。私たちが祈る時には、どんな場合でも、主が立ち上がって、行動され、そのみわざを見させていただくものであるべきです。

9月17日(水) サムエル記第一1章12～17節

「私は主の前に心を注ぎだしていたのです。」(15節)

エリは、ハンナが酒に酔っていると誤解しました。このことについて、ハンナが祈っているのか、酒に酔っているのか判断がつかなかったことについてエリの霊的な問題を指摘する人もありますが、ハンナは心で祈っていて、唇だけが動いて、言っていることが聞こえなかったので、誤解した可能性もありますし、当時は、立ち上がって、人々に聞こえるように祈ることが通例でしたから、まさかハンナが祈っているとはエリも思わなかったのかもしれませんが。もしかすると、ハンナも自分の祈りを人に聞かせようとは思わなかったでしょうし、自分のような者が声高に祈ることに躊躇した可能性もあります。いずれにしても、酔った者が神殿に来ることは赦されていませんので、エリは、ハンナを権威を持って叱責します。(14節) それに対してハンナは、15、16節で弁明していますが、その中で彼女は「私は主の前に心を注ぎだしていたのです。」と言いました。これが、ハンナの祈りであったということです。心を注ぎだして祈っていた彼女の祈りの特徴の一つが、主の前で長く祈っていたということです。(12節) これは、もちろん、ただ長く祈っていたということではないでしょう。むしろ、祈りに集中することによって、時が経つのを忘れるほどの祈り方だったということです。二つ目が、人に聞かせる祈りではなく、ただ心の中で神と自分が一対一となって個人的に親しく祈る祈りであったと言えます。私たちは主の前に心を注ぎ出す祈りをしているのでしょうか。私たちの祈りが主の御手を動かすような祈りになっているのでしょうか。

9月18日(木) サムエル記第一1章18節

「その顔は、もはや以前のようにではなかった。」(18節)

祈った後、「その顔は、もはや以前のようにではなかった。」とされています。以前は泣いて食事をしようとしませんでした。(7節) ハンナの内にあったのは、苛立ちと怒りでした。怒りについては、二回も「怒りをかき立てた」とあり、また苛立ちも6節と16節に二回出てまいります。その他には、苦しみがあり(11節) 募る憂いがありました。それらを自分の内側に抱えながら、ハンナは一体どんな表情で日々過ごしていたのだらうと思います。しかし、なぜ顔が変わったのでしょうか。それは、主が祈りに答えてくださることをハンナ自身が確信したからです。まだハンナは、主の祈りの答えを目の当たりにしたわけではありませんでしたし、いつ、どのようなかたちで主が祈りに答えてくださるかを、彼女自身が知る余地もありませんでした。しかし、彼女自身は、信仰によって主が必ず祈りに答えてくださると信じていることができたのです。「私たちが願うことは何でも神が聞いてくださると分かるなら、私たちは、神に願い求めたことをすでに手にしていると分かります。」(ヨハネの手紙第一5章15節) とあるとおりです。そして、これが心を注ぎ出す祈りです。昨日も見ましたように、ただ主と二人だけで、時間を忘れて、自分の内にあるものや願いなど、すべてを主の御前にさらけ出して祈りたいと思わされます。その時に、私たちの顔が変わるほどに私たちにも平安と確信が与えられます。私たちの内側にも表情を変えてしまうような憂い、苛立ち、かき立てられる怒り、苦しみ、募る憂いはありませんか。表情が変わるまで心を注ぎだして祈りましょう。

9月19日(金) サムエル記第一1章19, 20節

「年が改まって、ハンナは身ごもって男の子を産んだ。」(20節)

11節でハンナは「私を心に留め」と祈りましたが、まさにその祈りの通りに、主はハンナを心に留めてくださいました。そして、ハンナは身ごもって男の子を産みました。ハンナの心を注ぎだした祈りを確かに主は聞いておられて、それに答えてくださったのです。今日の箇所を私自身が深く黙想している時に、主は祈りを聞き、それに答えてくださるお方であることをあらためて思わされました。何をそんな当たり前のことをと思われるかもしれませんが、もちろん私自身も主が祈りを聞き、それに答えてくださるお方であると信じています。問題は、主が目を留めてくださるような心を注ぎ出した祈りをしているかということであり、私たち一人一

人が、周りの方々に主は確かに私に目を留め、私の祈りを聞き、それに答えてくださったという証しを持っているかということです。私たちも、そのような証しをいただくまで、またそのような祈りが答えられた証しを持っている方々は、ますます確信に燃えて、心を注ぎだして、主に祈ってまいりたいと思わされます。

ハンナに子がなかったのは、主がその胎を閉じていたからです。その理由は分かりません。主は、みこころによってそのようにされていたのです。しかし、そのことがハンナに心を注ぎ出す祈りへと導きました。そして、祈りは主が彼女に心を留めるようにし、主はその閉じていた胎を開かれたのです。私たちに対しても、主はみこころによって苦難の中を通されることがあるでしょう。しかし、主は意味なく苦難に遭わせられる方ではなく、何か深い意図があります。特に、私たちを心を注ぎ出す祈りへと導かれるためかもしれません。苦難の時、心がひどく苛立ち、怒りがかき立てられ、憂いが募るときこそ、主の御前に祈りましょう。

9月20日（土）サムエル記第一1章20節

「そして「私がこの子を主にお願ひしたのでから」と言って、その名をサムエルと呼んだ。」

クリスチャンの親であれば、子が与えられたことを主に心から感謝をし、将来この子が信仰告白へと導かれることを心から願い、祈りつつ名前をつけるのだらうと思います。まさに与えられた子どもたちの名は、親の信仰そのものとも言えるでしょう。ハンナは、与えられた子にサムエルという名をつけましたが、それは「私がこの子を主にお願ひしたのでから」という意味でした。それだけを見ますと、何となくハンナの信仰深さ、熱心な祈りによって子が与えられたことを誇っているようにも思えますが、決してそうではなく、むしろハンナは主に子が与えられることを願い、そのハンナに主が目を留められることで、サムエルが与えられたので、まさにサムエルが与えられたことは、完全に主の恵みであり、主への感謝の思いが、その名にはあふれています。恐らく、サムエルという名を聞いたり、口にするたびに、以前の自分の苦しみや主が目を留めてくださった恵みやあわれみを思い出して、子が与えられることで、そのような恥を一掃してくださった主への感謝が深まっていったのではないかと思います。

私たちも祈りを通して主に願って、主がそれに答えてくださった後は、すっかり主の恵みを忘れてしまうということはないでしょうか。よく言われるのが、クリスチャンは願う時は熱心に祈るが、感謝する時には、それほど熱心には祈らないということです。熱心に願うのと同じほどに、時にはそれ以上に主への感謝を忘れない者でありたいと思わされます。